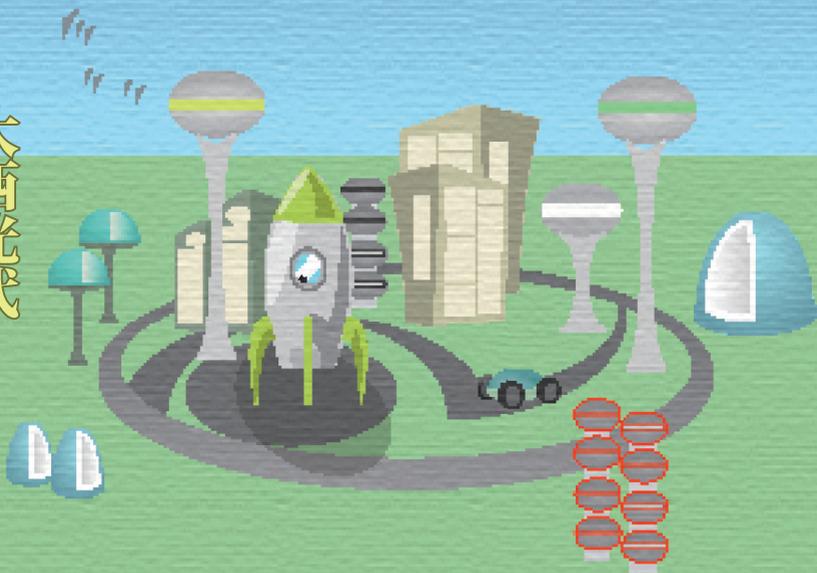


お試し版

未来の書

大西光代

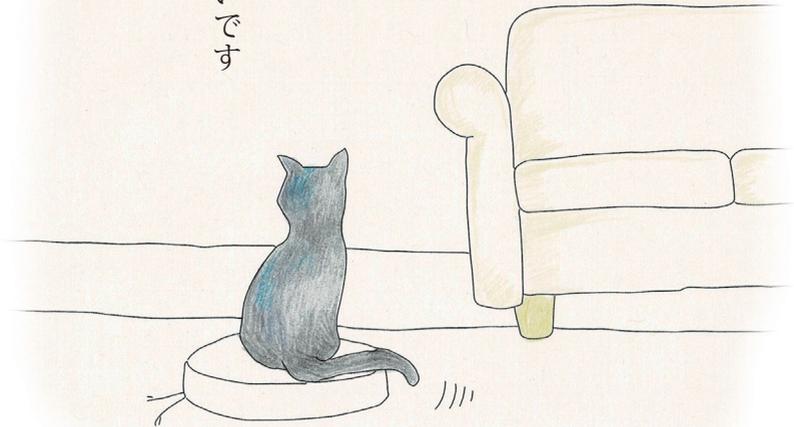


『未来の書』のお試し版です

目次と2話を収載しました



本の雰囲気伝わると嬉しいです



お試し版

未来の書

大西光代

はじめに 1

第一章 未来の日常 10

『夏への扉』の、未来は猫とともに

『九月は三十日あった』の教育の未来

『ボッコちゃん』に描かれた未来の家

『詩音が来た日』の介護の現場

『技術の結晶』の夫婦愛

『猫の王権』のゲームの未来

『だるまちゃんとかみなりちゃん』の子どもと読みたい希望の未来

第二章 象られた未来 40

『努力』の、歴史の真実と未来

『心にかけられたる者』の、AIとの関係

『都市と都市』の紛争地域の未来

『ハーモニー』のパンデミック後の世界

『神様』と『神様2011』の書き換えられた未来

『海の指』の混沌の未来

『宇宙のランデヴー』の太陽系外からの飛翔体

第三章

宙駆ける未来

『火星の人』のすぐそこにありそうな未来

『氷波』のかっこいいお金の使い方

『恒星間メテオロイド』の相対論的人間関係

『たったひとつの冴えたやりかた』の宇宙進出の黎明期

『夜明けとともに霧は沈み』の宇宙のミステリースポット

『遺跡の声』の遺跡調査

『七十四秒の旋律と孤独』の移動技術

70

第四章

彼方の未来

『もののあはれ』のアイデンティティを問う未来

『アヴァロンの闇』で考える宇宙移民に適した人材

100

第五章

遭遇する未来

- 『チギリスとユーフラテス』の少年高齢化する惑星
- 『狩人よ、故郷に帰れ』のテラフォーミングは雑草との戦い
- 『祈りの海』の科学と信仰の未来
- 『銀河風帆走』の天の川銀河からの脱出
- 『死の鳥』に描かれた神話のような地球の最期

第六章

もうひとつの未来

- 『闘闘妖精・雪風へ改心』の“宇宙よりも遠い場所”での遭遇
- 『闇の左手』の透き通った冬の光
- 『イリアム』『オリュンポス』のギリシアの神々エイリアン
- 『ブレインレース』の決して関わってはいけない異星人
- 『あなたの人生の物語』の異星人との意思疎通
- 『都市』『町』に描かれた2万年後の復讐
- 『星を継ぐもの』の5万年前の人類
- 『グラン・ヴァカンス』の海辺の町

『わたしの本当の子どもたち』の家庭と世界

『たんぼぼ娘』の約束の未来

『時砂の王』の過去と未来をつなぐもの

『歌う船「完全版」』のもう一つの身体

『トランスヒューマンガンマ線バースト童話集』の人類の究極形

『一億年のテレスコープ』の人を動かすもの

おわりに

『夏への扉』の、未来は猫とともに

『夏への扉』はロバート・A・ハインラインによって1956年に発表された作品です。このSF小説は、読者による人気投票では必ず上位にランクインするため、オールタイムベストと呼ばれています。描かれているのは、発表当時から14年後の1970年の未来と、さらに2000年の未来世界へと旅立った主人公ダニエルの物語です。つまり、時代だけ見ると今の私たちにとっては過去になってしまった未来です。ハインラインの描いた未来はどのくらい現実になったか、作中の科学技術と世界情勢を紹介しましょう。

* * *

『夏への扉』の1970年は、1956年からこの時代までに、冷戦は冷たいままでは終わらずに6週間戦争と呼ばれる核戦争がおこった後の世界です。冷戦下に暮らす当時の人はこの舞台設定をどう受けとめたのでしょうか。これから核戦争が起こるなんて恐ろしいと思うと同時に、核戦争の勃発にそこそこ

のリアリティがあったのでしよう。軍事技術をベースに発達したこの世界の科学技術は実際の私たちの知る1970年より発達しています。

1970年の未来に住む主人公ダニエルは優れた技術者です。平和になった今、必要なのは家事の機械化だと、彼は軍の研究所をやめ「おそうじガール」という自動掃除ロボットを開発し起業します。この掃除ロボットは、決して人とよく似た風貌をしていなく、自動で掃除を行い、終われば充電器まで自力で戻るなど、最近TVで見かけ、すっかり普及した家庭用掃除ロボットと良く似ています。ここより少しこの技術が遅れてやってきた未来に、私たちは住んでいるのだという気持ちになります。

恋人と親友に謀られて、生きがいともいうべき会社も乗っ取られ、拳銃の果てに核戦争による人類の絶滅を防ぐために確立されたコールドスリープという長期冬眠技術で2000年の未来に送られてしまった彼は、使い捨ての電子書籍リーダーのような形態で配達される新聞や、動く歩道が一般的になった未来の街を目にします。工業部品に必須な金属として金の同位体が合成されるようになり、金の価格が下落しています。これは現在のレアメタルやレアアース

の代替原料の研究開発に少し似ているかもしれませぬ。

一方で、それだけ進んだ社会でも携帯電話は存在せず、公衆電話を探す場面にはちよつとだけ優越感を覚えます。ファッションにも大きな革命が起きています。ファスナーに代わる技術によって体に最適にフィットする画一的な衣類を人々は着ています。現実では快適さという面では夏を涼しく過ごせたり、冬に暖かさを感じる機能性の衣料がこれに対応する進歩でしょうか、ただ快適性だけではなく美しさもファッションには大事な要素で、クラシカルなデザインがアレンジされて繰り返し再流行する状況に関しては、作者の未来予想は外れています。食事は安くて本物と遜色ない味の人工肉が一般的で、これも現実では研究開発中の一足先の未来の様子です。そして贅沢品である本物の牛肉がいまだに核戦争の影響で高濃度に放射能汚染されていたとたまにニュースになるくだりは、東日本大震災後の経験を思い出し、私たちの心をほろ苦くさせます。

ハインラインは献辞でこの本を「猫を愛するすべての人たちに」と書いています。作中に登場するピートという猫は主人公の愛する相棒で、どんなときにもへこまない、ガッツのある、自立と生命力の化身として描かれています。作

品に直接描かれていない気の利いた未来のエピソードが現在にあるとしたら、それは、掃除ロボットと猫の相性でしょう。もし、ハインラインもしくは彼が創造した人物であるダニエルが、ネットの動画サイトに投稿されている数々の掃除ロボットと猫の微笑ましい交流を見ることができたならどんなに喜んだことかと思わずにはいられません。

ロバート・A・ハインラインの『夏への扉』には「人生における輝かしい夏という季節に通じる扉は諦めなければ必ず開かれる」というメッセージにあふれています。困難を越えた先の明るい未来への渴望にこれほど響く作品はないでしょう。突然放り込まれた未来世界での主人公の奮闘とその先の大団円はぜひ実際に本書を読んで確かめてください。

【本の情報】

本国のアメリカでは1956年に雑誌に掲載され、1957年にハードカバーで刊行された、SFの世界では名作古典といわれる作品です。日本では一年後の1958年に翻訳・出版されました。現在、手に入りやすい日本語訳版は1963年の福島正実訳版（1979年に文庫化、2010年に新書化、2020年に新版化）と2009年出版の小野芙佐訳の新訳版（ともに早川書房）です。

『海の指』の混沌の未来

東日本大震災が被災地だけでなく、日本に住む多くの人に影響を与えた大災害だったことは誰しもが同意されることだと思えます。震災からしばらくの世の中を覆った重苦しい不安で、特にインターネットでは感情的なやりとりが多くみられました。私もしばらくSNSから離れるきっかけとなる出来事がありました。それは不安に付け込んだニセ科学商品の“放射能をなくせる”という商品について、そんなものは作れないと発信したところ、小さな子を持つお母さんから、子どもの健康を守るための良いものを潰そうとするひとでなしのように言われたのです。

飛浩隆の『海の指』は災禍と動物的ともいえるような女性の深い愛情という点で私に震災直後を思い出させる作品です。

* * *

『海の指』に描かれているのは、二十一世紀の半ばに破局的な災禍に見舞わ

第二章 象られた未来

れた後の、三〇五世代後の人々が暮らす世界です。時代がはっきりとしないのは、それだけ多くのものが一瞬にして奪われてしまったためです。地球のほとんどすべてが「灰洋」とよばれる、“そば粉を溶いたような”のつたりとした流体に飲み込まれています。

かつて日本と呼ばれた国の文化を受け継ぐ人々が暮らす、四国くらいの大さの「泡洲」という島が未来の舞台です。ここには七万人くらいの人が暮らしています。それがこの世界で日本に由来する存在の全てです。こんな小さな陸地が他にもいくつもあり、世界の人口は一千万人くらいと推定されています。そうした島々とは災禍以前に打ち上げられ、今も機能を維持している衛星回線によって細々としたやり取りが行われているようです。

灰洋はそれまで地球上に存在したものの情報を圧縮し別の状態にしたものがある——というのが、この時代の学校教育で教えられることです。これは、電子メールで送られてきた文章が、文字コードが違うために読めなくなってしまうていた時の、そこに並ぶ記号を見ているような状況が現実の海のように広がっていると想像してみると近いのかもしれない。灰洋に触れたものは、取

り込まれ灰洋の一部となります。そして、泡洲のような島は何らかの作用によって灰洋との間に緩衝となる領域を持ち、浮かぶように存在していると考えられています。

泡洲にあるもつとも大きな街に暮らす志津子と和志がこの未来の主人公です。災禍後の人々の暮らしは懐かしい昭和時代のようなようです。毎朝、テレビで気象予報のような海象予報を見ながら支度を済ませ、それぞれ職場へ向かいます。姉さん女房の志津子はこの街のバス会社で勤務をしています。和志の仕事は音響装置を用いて灰洋にさまざまな音をぶつけることで、中に溶け込んでいる物体をもとのように実体化させ引き上げることです。この頃の人類は、灰洋から鉱脈のように過去の遺産を掘り出すことで生活をつないでいるのです。

灰洋は、穏やかな時には恵みを与えてくれますが、時に荒々しく襲い掛かります。何年かに一度、灰洋から幾本もの指のようなものが突き出し、独特の音を発しながら、緩衝領域を乗り越え島を襲うのです。島の一部を灰洋に取り込んだり、悪夢のように変容し実体化したものが、押し寄せたりします。これが〈海の指〉と呼ばれるものです。自動車や医薬品が情報となって灰洋に安定状

第二章 象られた未来

態で保存されるとして、人間はどうでしょうか？〈海の指〉は、さまざまな思いを抱いたまま灰洋の一部と化した人の感情が、変換されずに残され純化し、形を持ってしまったもののように私には思えます。

今度の〈海の指〉には、志津子の前の夫である昭吾の姿がありました。日常的に志津子を痛めつけていた昭吾は和志の職場の先輩でもありました。志津子に依存していた昭吾の思いが街を壊し志津子を探します。この未来は、そして特に志津子の、女性が愛する者を守ろうとする時の強さは、私が震災後の混沌の中で経験した個人的な心の痛みをなぞるものでした。しかし、不思議なことに、読後は少し心が軽くなりました。〈海の指〉から愛する者を守ろうとする志津子と和志、それぞれの行方は、ぜひこの未来の物語を読んで確かめてください。

【本の情報】

初出はWebコミックサイト「モアイ」(2014年10月14日更新)です。その後、本作は、大森望の編集による、円城塔、神林長平といった複数の作家の書下ろし作品を集めた短編集『ヴィジヨンス』(講談社2016年10月刊)に収録されたほか、作品集『自生の夢』(河出書房新社2016年11月刊)にも収録されています。

お試しはここまでです

気に入りましたら

ぜひ本書をお求めください

